

## ロツツエ 妥當説の由來（承前）

（ライブニッツを中心として）

錦 田 義 富

### 九

ライブニッツの早い時期の著作に、次の様な言葉がある。『砂上に家を建てようと思ふ人は、堅固な地層に達する迄、之を掘下げて行かねばならぬ。纏れた結節を解かうと欲する人は、先づ以つて手がかりとなし得べき絲口を探さねばならぬ。重荷を動かさんが爲めに、アルヒメロデースは唯一の不動點を求めた。認識を基礎附ける爲めには、丁度其通りに、これに足場を托しこれから出發して確實に前進し得べき一つの確乎不動なる點が必要である。此發足點は正に真理の一般性質に〔in ipsa generali natura Veritatum〕求むべきである』(Opusculs et fragments inédits de Leibniz, par Couturat, p. 401) デカルトの如く自覺の直證と云ふ内的經驗の事實から出立しないで、真理の一般性

質即ち真理の定義から發足したライブニッツは、寔にカッシラーも評した通り、認識の論理的原理の問題其者を研究の自己目的とした、近世哲學史上最初の人であると云ふてよまずであらう(Cassirer, *Das Erkenntnisproblem in der Philosophie und Wissenschaft der neueren Zeit*, II. 2A, S. 126)。彼の哲學全體——其論理學・認識論は更にも云はず、其形而上學・神學・倫理學・美學に至る迄、彼の思想全體の根柢を形成し之を遍照する光明となつて居るのは彼の眞理觀である。而してこれが又カントの主觀的妥當說、ヘルバルト、ポールの客觀的妥當說並びに兩者の綜合を企圖したわがロツツェの妥當說の直接想源となつて居るのである。(便宜の爲め以下屢引用する文獻の略符を誌して置くこととする)。

(1) *Gas. Sys.* = Cassirer; *Leibniz' System in seinen wissenschaftlichen Grundlagen*. 1902.

(2) *Gas. Erk.* = ; *Das Erkenntnisproblem in der Philosophie und Wissenschaft der neueren Zeit*, Bd. II. 2A, 1911. Bb. 5, Kap. 2, Leibniz.

(3) *Cont.-Log.* = Couturat; *La Logique de Leibniz d'après des documents inédits*. 1901.

(4) *Cont.-Mét.* = ; *Sur la Métaphysique de Leibniz avec un opuscule inédits*. 1902. (*Rev. d. Mét. et d. Mor.* Tom. 10, p. 1—25)

- (5) Dut. = Dutens ; Leibnizii Opera omnia. 6 Bde. 1765.  
 (6) Erd. = E. Erdmann ; Leibnizii Opera philosophica. 1840.  
 (7) Gerh. = Gerhardt ; Die philosophische Schriften von Leibniz. 7 Bde. 1875—1890.  
 (8) Math. = „ ; Leibnizens mathematische Schriften. 7 Bde. 1848—1863.  
 (9) Rus. = Russell ; A Critical Exposition of the Philosophy of Leibniz. 1920.

哲學的思索の發足點を眞理論にとるものは、命題或は判斷の考察から初めねばならぬ。單なる客觀物には眞もなければ偽もなし。眞偽の區別はたゞたゞ命題又は思想に於てのみあらはれる (Vides ergo veritatem esse propositionum seu cogitationum. Dialogus, 1677 ; Gerh. VII, 190)。然らば或命題が妥當である爲めには、夫れは如何なる條件を充たねばならないか。抑も判斷眞偽の標準は如何。ライブニッツがこれに對して與へた解答は極めて簡單明亮である。即ち命題の眞ならんが爲めには、其賓概念は主概念に含まれてあらねばならない、眞なる命題とは其賓辭が主辭の内にある命題の謂に外ならぬと (praedicatum inest subjecto ; le predicat est dans le sujet)。而して此要求たる、命題が必然偶然孰れたるを問はず、全稱單稱の何れたるを論ぜず、將又過去現在未來何れの時を現はすかに頓着せず、苟しくも夫れが眞であり得る爲めには、必ず以つて充足

されねばならぬ論理的條件であるのである (Discours de Métaphysique VIII ; Gerh. M, 433. Lettre à Arnauld VII, IX ; Gerh. II, 46, 56)。此事はライブニッツが隨處に言明解説を怠らざる處であつて、正しく彼の眞理觀の基本的觀念を表現せるものである。而して單稱命題の眞をも此要求に従ふべきものと考へたる點に、彼のモナードの説を産み來らでは措かない切要なる論理的根源が伏在するのである (Remarque sur la lettre de Arnauld, 1686 ; Gerh. II, 43) 夫れでは *predicatum inesse subjecto verae propositionis* と云ふ時の要求は、抑も如何なる意味を藏して居るのであらうか。

之を極めて一般的に解釋すれば、右の要求は命題對象性の内在を意味するものと考えられる。眞なる判断は主概念の内容に異種無縁のものが添加して成立つものではない。主概念が自己に内在する豊富なる意味を顯現開展する處に判断の眞は存する。命題の對象性は命題其者の内面的關係に基づかなければならぬ。主辭が賓辭を含むとは此の如き論理的要求を表はすものに外ならないのである。此意味は經驗派の判断論と對照せしめる時明となつて來る。經驗論者は言ふであらう。判断とは經驗によつて偶然與へられたる内面的には無縁の異種表象を結附けたものに過ぎない。此結合の確實性を保證するものは經驗上の共在であると。然し共

在するものが相屬すると云ふ論理的必然性は何によつて與へられるのであるか。二つの表象が共在すると云ふ經驗的事實が如何ばかり集積され繰返されても夫れから兩者の必然的相屬を導き出すことは出來ない。aとbとの表徵が一つの概念に於て相屬すると云ふこと、sとpとが普汎妥當的關係に立つと云ふことの爲めには、彼等其者の裡に何等か内面的必然の連結が實存しなくてはならぬ。而して斯の如き當體的連結は、實に經驗派の採つて以つて最も有力なる武器となす歸納法其者の成立條件であり其妥當の豫想である。此故にライブニッツは Nizolius の唯名論に反對して、『歸納法は夫れとは別の普汎的理性的根據を有する命題の援け無くしては何等の知識をも與ふるものではない、否道德的蓋然的確實性をさへ持つものではない』と主張するのである (Dissertatio preliminaris de alienorum operum editione, de Scopis operis, de Philosophica dictione, de lapsibus Nizolii, 1670; Geih. IV, 160 F.) ニツキウスに依れば一般概念とは觀察されたる個々多數の事實を、便宜の爲めに取纏めて、一の共通名目に總括したものに外ならない、夫は探究の手段とはならずして、單に既得の個別的覺知を保管する容器に過ぎないと。ライブニッツは反駁して曰く、概念の一般性が單に個々の事實の總和に過ぎずとせば、概念より個別を導き來ることは寔に *petitio principii* であら

う、然し概念の含意する一般性は單なる分量的一般性ではなくて純性質的のものである。其『全體』は *totum discretum* でなくて *totum distributum* である。即ち算術的全體でなくて論理的全體である。實に經驗の提示する個々の事實的真理は、理性的一般的真理に還元し悉すことを許さない特性を持つものでもあらう。これが論理的理解には特殊の方法と原理とを要求するものでもあらう。ライブニッツは之を認容するに吝かではなかつた。經驗判断の獨自の性質を看取し、夫れが論理的思惟に對して新課題を提起し、新原理を要求することを初めて明白に立證した程の彼である。然し如何に經驗的單一判断でも、何等かの仕方にて於て (*en quelque facon*) 其賓辭が主辭に含まれなければ、真理の世界の一員となることは出來ないのである (*Lettre à Arnault, IX; Gerh. II, 55*)。真理に種別ありとすれば夫は主賓概念の内面的關係の上に於て言はるべきことであつて、真理一般の成立條件は必ず此 *praedicatum inest subjecto* にあると見なければならぬ。

中世哲學者も云ふた様に、命題真理の條件は *in-esse* にある。然し此條件の充足は必ずしも顯然的 (*expressement*) でなくてもよふ、含蓄的 (*virtuellement*) であつても構はぬ、要は主辭が賓辭を含むにあるのである (*Discours, VIII; Gerh. IV, 433*)。然るに此條件の果

して充足されて居るや否やの不明なる命題が多い。所謂必然的にして自明不可疑と考へられて居る公理の如きものの中にさへも此種のものが多いのである。そこで論理の任務は種々の形相をとれる諸命題に眞理たることの證明——命題の構成要素たる概念其者の内面的關係に基いた證明——換言すれば主辭が賓辭を含むことの證明を與へるにある。此證明をば苟しくも眞と云ひ得る凡ての種類命題に就て試みんとするのが、ライブニッツの論理の全體即ち彼の所謂普汎學(*Scientia generalis*)の理想である(*Littia et Specimina Scientiae generalis; Gerh., VII, 62. Vlg. Math., I, 26 a.*)。課題は定まつた。然らば夫は如何なる原理に基き如何にして解答が與へられたか。

命題證明の原理として、ライブニッツは自同律矛盾律と理由律との二つを提出して居る。兩者孰れを用ゐても之によつて命題の眞なる證明の與へられた時には其命題は先天的證明(*Probatio a priori*)を持つこと云々(*Lectio à Arnould, VIII, Gerh., II, 62. Cont., M. ét. 2.*)。又彼は命題を永遠的必然的なる理性的眞理と事實的偶然的なる經驗的眞理とに分ち前者を可能的者(*possibles*)本質(*essences*)とよび後者を現實的者(*actuelles*)存在(*existences*)と名けて嚴に區別して居る(*Monadologie, 833, 434.*)。而して普通には自同律が前者の建立原理となり、理由律が後者の建立原理であると見做されて居る。一應右の

如くに區別し得るが、然し兩者の性質關係等を密に尋ねて行くときは、種々の問題を生じ、しかく無雜作に論じ去る譯には行かなくなつて來るのである。先づ自同律に基く理性的眞理の方から檢べて見よう。



自同律と矛盾律とはライブニッツにあつては同一義の原理と見られて居る (*Veritatum in rationis prima est principium contradictionis vel quod eodem redit identitatum*. Gerh., IV, 357°)。主辭が賓辭を含むの證明を課題とする自同律は等價置換の原理として働かねばならぬ (*le principe de la substitution des equivalents*. — Lettre à Placcius, Dut., VI, 1, 32) 詳言すれば、主概念及び賓概念を分析して之より單純なる概念に置換へ、以つて前者の中に後者を含むことを示すか、或は兩者の概念要素の同一なることを現はし、以つて其命題の自己整合なることをあかすのである。斯かる意味に於て主辭が賓辭を含むの要求を充足し得る命題は、總て永遠必然なる理性的眞理と言はれるのである。此立場からしては眞理の形態は窮極二つに歸するであらう。A est B, B est A である二つの命題を結合して一つの命題にあらはす  $A \equiv B$  ou  $A \equiv A$  であり、他は A contient B である。即ち繋



辭が相等をあらはす場合と包攝をあらはす場合とである (*Generales Inquisitiones de Analysi Notionum et Veritatum*, 1686. — *Cont.-Log.*, 344-347 の解説参照)。斯くの如き分析的思考法の理想を追ふ命題證明の意義を最もよく窺ふに足るのは *Courinus* との往復書翰である (*Briefwechsel zwischen Leibniz und Couring*, 1670—1678, Gerh., I, 158-206)。今これに依つて彼の意のある處を明にして見よう。

ライブニッツは先づ證明は定義の連鎖に外ならずと主張した (*Est enim Demonstratio nisi eadem definitionum*, 174)。謂ふ心は證明は各の名辭を其要素に分解することによつて達せられる、即ち各の名辭に其定義を置換へることによつて命題は證明されると云ふのである。故に又曰ふ、證明の術は二部より成る一は定義する術即ち分析で他は結合する術即ち綜合であると (*ibid.*)。コンリングはこれに對して然し證明し得べからざる命題即ち公理あるを如何との異議を提出した。ライブニッツはこれに答へて曰ふ。便宜の爲め又科學が其研究を進めて行くに當つて、公理や公準を無證明のまゝで使用することは差支ないばかりか左うすべきものである。然し公理と雖も證明を拒むものではない。抑も公理は何故に疑ふ可らざる確實性を有すと考へられるのであるか。之を経験に基かしむることは出來ない。夫は自同律に依つての

み確實であると云ふを得る。故に直接自同律に基づく處の最も嚴密なる自同命題と、これとは別の生源を有する經驗命題とを除いては、總ての眞理は證明し得られるのであると(188)。彼は此意を次の書翰に於て一層明確に細説して言ふ。總て證明は定義公理・公準證明されたる定理及び經驗的眞理に倚るものである。此中證明されたる定理は原本的眞理に數ふることは出來ない。而して公理と公準とは總て自同命題に約すべきものである。されば凡ての眞理は結局は定義と自同命題と而して經驗命題とに歸する(*patet domique omnes veritates resolvi in definitiones, propositiones identicas et experimentales*)。而して必然的眞理は經驗に依存せしめることは出來ないから、夫は窮極する處定義と自同命題との二者を以つて其證明の要素とするものであると(194)。即ち彼の意は、廣義に於ける命題證明の究竟要素としては三種を數へ得るけれど、其中の二者だけが必然的眞理の要素であると云ふのにある。經驗命題については後に譲り、茲には當面の主題に關係ある自同命題と定義とに就て、少しく立入つた證索をして見よう。

ウイブニッツは Apollonius, Proclus, Robertal 等がエトクリッドの自明不可疑の公理としてあげたるものに就ても尙證明の必要を主張したことを口を極めて賞讃した(191)

réceptes pour avancer les sciences. Gerh., VIII, 165, Lettre à Foncher, I et XIV; Gerh., I, 372, 402, Nouv. Ess. IV, 78, 10°. 然し彼と雖も總ての公理が證明し得と考へたのではない。彼は公理をば原本的公理と第二義的公理、或は自同的公理と非自同的公理とを區別し、前者は證明し得ざる又之を必要とせざる根本的の眞理であり、後者のみが證明し得られ又之を必要とすと説いて居る(Nouv. Ess. IV, 78, 1. Lettre à Bernoulli; Math., III, 321)。夫れでは證明し得られ又之を必要とする公理とは如何なるものと云ふに例へば『全體は部分より大なり』とか『等しき量に等しき量を加ふれば等しき總和を得る』の如きこれである。前者は各の量はそれ自身に等してふ證明し得ざる自同的公理を許せば第一格の推論式によつて證明し得る(Demonstratio axiomatum Euclidis; Math., I, 2 Cont. Méé2)。後者は自同律と『等』(aequalia)の定義とによつて證明し得る(Lettre à Burnett; Gerh., III, 258)。其他公理と迄は云へぬけれど夫れに近いものに $2 \times 2 = 4$ がある。これは2, 3, 4てふ數の定義と等價置換の原理とによつて證明される(gegen Descartes und den Cartesianismus, XII; Gerh., IV, 403, Nouv. Ess. IV, 78, 10°)。是等の例によつて彼が omnes veritates necessariae sunt virtualiter identicae と云ふ主張の意味もよく分ると思ふ(Lettre à Burnett; Gerh., III, 259)°

含蓄的にでなく顯現的に自同的なる命題は彼が自同的者 (identiques) 原始的理性真理 (les verites primitives de raison) と稱するもので、夫は他によつて證明し得ず直覺的に直接認知せらるる外ないものと見られて居る。所謂自同的公理は其中に含まれるのである。自同的者には肯定的と否定的との二種ある。肯定的自同的者とは、たとへば『AはAである』『BでBある』『私はなる處のものになるであらう』『私の書いたものは私の書いたものである』『長方形は長方形である』『若し四邊の正形が正方形であれば此圖形は正方形である』等である。否定的自同的者は矛盾律に屬するか *disparates* に屬するかの孰れかである。前者の例には『Aは非Aはであり得ない』『等邊三角形は非三角形ではあり得ない』等があげられ、後者の例には『熱は色と同一物でない』『人と獸とは同じでない』『等角三角形は等邊三角形でない』等があげられて居る (Nouv. Ess., IV, 3; Genh., V, 343)。ラッサン は most of these instances assert nothing; the remainder can hardly be considered the foundation of any important truth (Rus., 17) と冷評し去つた。ライブニッツは早く斯る人のあらんことを豫期して前掲引例の次に言うて居る。『聽者は堪忍袋の緒を切らして、汝は愚にもつかぬ命題をつくつて自ら慰んで居るのだ、總て自同的真理は何の役にも立たぬものである、と斯う言ふかも知れない。然し論理や幾何の

根本原理は此自同律矛盾律であることを思はねばならぬ」と。然し乍ら如何に最負目に見ても、茲にあげられたやうな例が悉く所謂原本的眞理として同等の價値と重要とを持つものとは考へ難い。此意味に於てラッセルの非難には幾分の道理がある。然しライブニツの自同的者には、ラッセルの看逃した切要なる論理的意義の伏在するを看取せねばならぬ。ライブニツによれば其内に兩立せざる要素を含まざる限り如何なる命題如何なる概念にても其自同性を立言する命題の形に於て永遠必然の眞理である。單なる同語反覆に過ぎないものでも、苟しくも夫れが何等かの意味を持ち得る限り眞理の世界の一員となり得るのである。斯くて自同律に基く命題をば嚴に存在と切離して其眞理性を純粹に考察する思想は、一面に於ては實在論的模寫説の破棄となり、他面には純粹客觀的妥當説の提唱となり、ライブニツの眞理觀の最も切要なる部分をなすものである(第十四節參照)。暫らく此點を差措き極めて一般的に考へて見ても、彼の所謂自同的者の重要は之を認めなければならぬ。論理的對象の思惟の第一歩は思惟對象の固定である。固定の第一段は意味の超時間的超存在的自同性即ち意味の自己保存の確保にあらねばならぬ。ライブニツの自同的者は少くとも此意義に於て是認さるべき權利を有するのである。而して彼が自同

律矛盾律を命題の先天的證明、對象性の第一原理としたことは決して無意義な業ではないのである。勿論對象的思惟は單なる固定に止まることは出来ない。意味の自己保存は單なる自同性の確保だけに止まることは出来ない。自己保存が同時に自己發展となり固定が同時に流動であり得る爲めには自同律が一層深い意義に解釋されるか或は此以外此以上に更に別種の原理を要する。そこに雑多の統一と云ふ綜合の原理、或は『AはAである』を成立たしめる system or world の想定が必須となつて來るであらう。然しこれはライブニツの第二原理即ち理由律の問題である。吾は尙暫らく自同律に基く先天的證明を追究して見なければならぬ。

彼は曩きのコンリングへの書翰に於て、命題の先天的證明の究竟要素として定義の外に自同的者をも認め乍ら、其往復書翰の最後迄、*demonstrationem esse catenam definitivam* として當初の主張を抛たうとしなかつた(Letter à Couring, XIV, XVI, Gerh., I, 194, 205)。これは議論の行懸り上の過言と見られぬでもない。何となれば彼の自同的公理は決して單なる定義と同一視せらるべきものではない、公理は彼に依るも必然即ち矛盾律に基き其反對の考へ得べからざるものである、公理は定義に依て現はされることはあらう、然し公理の眞なる基礎は定義に存せずして自同律に求めなければなら

ぬからである。然し彼の定義に就ての思想を仔細に検査し行くと、證明は定義の連鎖に外ならずとの彼の主張も、左迄無稽なものでないことが分つて來るのである。

## 十一

命題の先天的證明が自同律に基く分析にありとすれば、命題に含まるる各概念の定義は其前提であらぬはならない。ライブニッツが定義を證明の究竟要素の一到に數へたるは、寔に正當のことである。而して彼の論理の課題よりせば、定義は定義せらるべき當の概念の分析でなくてはならぬ。命題の分析之を證明と云ひ、概念の分析之を定義と云ふ。『如何なる言葉も定義なしに許す勿れ、如何なる命題も證明なしに許す勿れ』と云ふ二つの規則を以つてデカルトの夫れに置換へんことを提案したの  
は彼の課題の性質をよく顯現せるものと云ふことが出来る (*Nova Methodus discendae  
doctendaeque Jurisprudentiae*, 1667. *Cont. Log.*, Note VII, 561。 命題の先天的證明成功の程度  
は、之を自同命題と十全なる定義とに還元することに依存する。従つて定義の十全  
に行はるゝや否やは直ちに命題證明の效果に影響して來るのである。而して彼に  
よれば、概念の完全なる定義は命題の證明よりも一層困難である。何となれば命題

の證明にあつては單に主辭が賓辭を含むことを知れば足れりとするけれども概念にあつては之を定義すべからざる單純要素に分析し悉くすにあらざれば十全の定義を與へることが出來ない而してこれ極めて困難の業であるからと (Math., I, 2. Lettre à Foucher, IX; Gerh., I, 792). 夫れでは彼の謂ふ處の定義即ち概念分析とは如何なるものであるか。又夫は命題の先天的證明に對しては如何なる意味を持つのであるか。これより主として *Meditationes de Cognitione, Veritate et Ideis*, 1684 (Gerh., IV, 424ff) *De Synthesi et Analysisi universalium seu Arte inveniendi et iudicandi*, 1684? (Gerh., VII, 293ff) *Discours de Métaphysique*, XXIV (Gerh., IV, 450) の三書によつて彼の定義論を討ねて見よう。

彼は先づ定義を『唯名的』と『實義的』とに區別した。唯名的定義とはホッブスの云ふ如く定義さるべき當の對象の或特徴をげて之を自餘の對象と異別するを得せしむるに止まるものである。されば任意に撰びとれる一つの言葉を以つて複合物を代表せしむることによつても此定義の目的は達せられる。斯る氣隨的定義に基く命題の證明は同様に氣隨的たるを免れない。ライブニッツはこれに反して定義は實義的でなくてはならぬと主張する。謂ふ心は概念を其構成要素に分解し複合觀念を單純觀念に置換へ、是等の要素間に矛盾なきを示さんことを要求するのである。實義



的に定義された概念は『可能』であると云はれる。可能とは自己矛盾を含まざるの意である。自己整合の義である。概念が其の構成要素の間に何等の矛盾も持たずしてよく結合されてあることの示されたる時、夫れは可能なる概念であると云はれ、而して定義は實義的であるとよばれる (*De Synthesi*, 293)。可能は概念直偽の標準である。可能なる概念は眞であり不可能なる概念即ち矛盾を含む概念は偽である。唯名的定義と實義的定義との相異は一に概念の可能を示すや否やに係つて居る。 (*Meditationes*, 424f)。然るに概念の可能を證明する途は二つある。後天的と先天的とが即ちこれ。可能が經驗によつて證明されたるのみの時には、定義は『單なる實義的定義』と云はれ、夫れが先天的に證明されたる時には、定義は『實義的にして且つ因果的な定義』とよばれる (*Discours*, 450)。概念可能の先天的證明とは、自同律に基いて概念を其構成要素或は可能なることの既に知られてある他の概念に分解し、夫等の間に不兩立性なく矛盾なきことを明にするの謂である (*Meditationes*, 425)。而して *Discours* にては先天的定義と因果的定義とは相即されて居るが (*Nouv. Ess.* III, 38, 18) も同様、*Meditationes* にては兩者は區別され、*Discours* にて一例としてあげられた *In generation possible de la chose* を示すもののみが因果的定義と云はれて居る (*idique fit inler alia, cum intelligimus*

modum, quo res possit produci, unde prae caeteris utiles sunt Definitiones causales)。他の場合にも屢々發見する如く、此場合にも彼の言葉の使用法が一定しないのであると見れば一應の説明は、つく 兎に角因果的と云はれる所以は Meditationes の説明によつて明に理解される。即ち概念要素の兩立性—其先天的可能性は該要素の綜合によつて當の概念を生産し得る方法を示すことによつて最もよく證明されると云ふのである。而して之を以つて一般先天的定義の典型的の場合を現はすものと見れば Discours の如く兩者を相即せしめても不可ないのである。否、一層正當には、本來の實義的定義と先天的定義と因果的定義との三者は異語同義であると思ふ。De Synthesi にて實義的定義とよぶ處のものは正しく此種の意味するのである(Gerh., VII, 293f.)。最後に分析を窮極迄推進めて原本的概念に到り其可能の先天的證明を必要とする如きものを全く想定しない時、定義は『完全或は本質的定義』と云はれる(Discours, 450°。定義は複合要素よりなる概念に就てのみ可能である。而して複合概念の定義は他によつて定義し得ず證明を要せざる直接自明の單純概念の存在を前提する。此前提なくしては定義は循環論に陥る外はない。ライブニッツはよく此事を意識して居た。彼が不可分割的概念或は第一可能的者とよび (notiones irresolubiles; prima possibilis.—Me-

490 dilaciones, 435) 或は定義を與へ得ざる單純觀念と云ひ (idées simples.—Mond., §. 35) 更に

は又理性的觀念、審知的觀念と名くるもの (idées intellectuelles ou intelligibles.—N.E., Gerh., V, 21, 77) 正しくこれに該當するのである。

定義の目的は概念の可能即ち眞なることをあかすにある。此目的を達する爲めに用ゐらるる方法は概念の分析である。而して其分析の原理は等價置換の原理としての自同律である。之によりて見れば、命題の先天的證明と概念の先天的定義との間には、顯著なる平行の存するを看取するに難くない。曩きに命題の先天的證明の究竟要素は定義と自同命題との二つであることを明にした。然るに今や定義の究竟要素は定義すべからざる單純觀念であることを知つた。是故に必然的理性的眞理の究竟要素は自同命題と單純觀念との二者であると云はねばならぬ (Mond., §. 35)。夫れでは此兩要素は如何なる關係に立つものであらうか。此點を明にする爲めには、一般に概念と命題との關係をライブニッツは如何様に考へたか、又彼の單純觀念とは果して何者であるかを吟味して見なくてはならないのである。

ライブニッツは多くの場合、一の全體としての命題と之を構成する部分としての概念(觀念)とをば並立的位置に置いて論じ、命題の先天的證明の要素たる自同命題と單純觀念とをも對等の權利を有するものの如くに取扱つて居る(De Synthesi; Gerh., VII, 295. Monad., §. 35. Nouv. Ess.; Gerh., V, 144, 21, 45, 67, 432)。或場合には更に一步を進め『總ての必然的眞理は單純觀念の成果に過ぎず』『理性的觀念は必然的眞理の源泉である』『後者の性質は前者の性質に依存す』とさへも明言して居る(Nouv. Ess.; Gerh., V, 77, 21. Discours, XXVI)。此主張は二つの點に於て不合理である。第一に夫は全體としての命題よりも部分としての概念を論理上先行せしむるの點に於て不當である。眞理の世界に於ては、何時でも全體あつての部分である。部分を集めて全體がつくられるものではない。全體は部分の前提であり、命題は概念に先立たねばならぬ。兩者を對等に取扱ふさへ既に不都合である。況んや概念に論理的優越を與ふるに於てをやである。然し從來の形式論理は概念論より初めて命題論に進むを常とし、一般學者は沒批評的に其儘之を傳承し來つたのであるから、彼も不用意に之れに隨順したのであると見れば、一應の辯解はつくことである。たゞ如何にしても奇怪なるは概念についても眞僞の別を立て、單純概念を以つて其最も基本的なる眞理となし

て居る第二の點である(第十一節參照)。若し是を是認するとすれば、眞偽はただゞ命題にのみ存すとの立言は撤回しなければならぬ(第九節參照)。Dialogus 1677に於て眞偽は命題或は思想にのみ存すと云ふ時の思想とは命題と區別しての概念を意味すと見ることが出来る。しかすれば彼は初めより命題と概念との孰れに於ても眞偽の別はつけ得と考へたものと云はねばならぬ。然るに又彼が眞理は概念其者よりは寧ろ概念相互の間の關係即ち命題に求むべきを言明して居る箇所も尠からず發見される(Nouv. Ess., IV, 2, 5; Genh., V, 343, 377)。此一見相容れぬ如く思はるる二つの主張は如何にして調和することが出来るであらうか。然し進んでライブニツが概念又は觀念の眞或は實(vernünftig)を云ふ時の眞意を究むる時は、上述の矛盾に對しても容易に統一的解釋を與へ得るのである。而してこれと同時に單純觀念と自同命題との關係についても一層明亮なる理解を獲來ることが出来るのである。

ライブニツに依れば、概念又は觀念の眞偽或は實非實とは、存在と云ふことに對しては無關係であつて、單に其可能なるや否やを意味するに止まる(Discours, XXIII. Nouv. Ess., II, 30; Genh., V, 245, 246)。即ち實義的定義を持ち得る概念は總て眞或は實である

と云はれるのである。然るに既に見た通り此可能の證明には先天的と後天的との二種ある。今當面の問題とするのは其中前者である。先天的證明を持つ概念とは矛盾なき概念の謂である。矛盾の有無は判斷或は命題に就てのみ云ひ得ることである(Nouv. Ess. IV, 2. Gerh. V, 343°)。此故に概念の眞又は僞とは當概念の可能又は不可能なることの une autre affirmation tacite に於てのみ云はれるのである。(Nouv. Ess., II, 32; Gerh., V, 250°)。此故に又彼は『觀念の眞とは其觀念對象の可能を肯定する命題の眞を意味する』と云ひ(Nouv. Ess., IV, 5; Gerh., V, 378)『可能なる或は眞實なる觀念は其中の一の判斷を藏す』と主張するのである(Lecture à Foucher, VI; Gerh., I, 385°)。要之に概念の眞とは實は便宜上の省略語であつて嚴密なる表現を用ゐれば其可能を立言する命題の眞を意味するのである。單純觀念に就ても理に於て異なる處はない。其可能なるとの他によつて證明するを得ざる自己矛盾なきことの直接自明なる概念を單純觀念と云ふ。これ正しく曩きの原本的理性眞理或は自同命題でなくして抑も何であらう。ライブニッツは何處にも此兩者の相即を言明して居ない様である。然し彼が概念の眞を言ふ意を推究めて行く時は彼の所謂自同命題と單純觀念とは同一種類の等しく自同律に基く眞なる命題であると云はざるを得ないのである。されば

命題の先天的證明の究竟要素は自同命題と定義或は自同命題と單純觀念と云ふ並立的位置に立つ二種のものでなくて、實は自同命題一般或は自同的者と云ふ唯一種に歸着するのである。斯く考へて來ると、曩きに命題の證明は定義の連鎖に外ならぬとの一見奇異なる主張の實は單なる議論の行懸りの上の過言ではなくて、充分は認せらるべき理由を持つことが會得されるであらう(第十節參照)。夫れでは兩者は全然同一で何等の點に於ても差別する處無いかと云ふに、矢張り其間には見逃し難き相異が嚴存する様に思はれる。此點に就て明亮を欲すれば、今暫らく彼の單純觀念の探究を續けて行かねばならぬ。先づ彼の定義論に結附けて説かれて居る認識標準説を窺うて見よう。(以下主として *Meditationes*; Gerh., IV, 422ff. による。尙 *Discours*, XXIV—XXV; Gerh., IV, 449ff. *Nouv. Ess.*, II, 29-31; Gerh., V, 236ff. 參照)。

概念が表現されたる當體を覺知せしむるに足るものを明晰と云ひ、これに反するを曖昧と云ふ。明晰なる概念について其要素を列舉し得るものを判然と云ひ之に反するを混亂と云ふ。判然たる概念に於て其概念其者のみならず之を構成する總ての要素を判然と認識したるもの換言すれば分析の十全に行はれたるものを合宜的と云ひ、之に反するを不合宜的と云ふ。合宜的なるものは更に分れて二となる。

象徴的と直覺的とこれである。象徴的とは概念の全要素をば之を代表する他の符號又は名目にて置換へ認識される場合を云ふ。例へば千角形と云ふ如き概念は此例である。算術幾何にては此種のものが多い。直覺的とは其概念の全要素が一時に一緒に而も判然と認識され得るものゝ謂である (*Est quand mon esprit comprendra la fois et distinctement tous les ingredients primitifs d' une notion, il en a une connoissance intuitive qui est bien rare*—*Discours*, XXIV, Gerh., IV, 495f.)。一般に複合概念即ち定義せられ得る概念については精々の處にて合宜的象徴的認識に止まる。然るに夫の己自身は定義すべからざる而も他の總ての定義の根柢となる單純觀念については——而してこれのみが——合宜的直覺的に認識し得るのである (*Meditationes*, 423)。<sup>o</sup> 之を前の定義の分類に照應せしむれば、判然たる概念は唯名的定義を有するもの、合宜的觀念とは實義的因果的定義及び完全定義を有するものを意味する。茲に吾々の問題とすべきは合宜的直覺的に認識される單純觀念である。

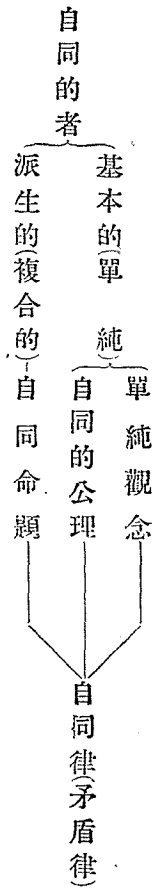
ライブニッツは直覺的直接的をば先天的理性的と後天的經驗的とに區別して居る。而して原本的自同命題の如きは前者に、基本的存在命題即ち自覺の事實は後者に配して居る (*Nouv. Ess.*, IV, 2, 9; Gerh., V, 344, 415)。<sup>o</sup> 先天的直接とは自同律に基く直接性の



謂である。即ち主辭と賓辭との間の直接である (Nov. Ess., (Gehl., V, 415)。今單純觀念の直覺的認識も之と同じく先天的理性的の直接でなくてはならぬ。言葉を換へて云へは自同律に基く直接性の謂であらねばならぬ。これ正しく單純觀念の自同性を立言する自同命題ではないか。夫は直覺的に認識せられると云ふ原本的理性真理即ち自同的者ではなからか。さればこそライブニッツは *toutes les définitions adéquates contiennent des vérités primitives de raison et par conséquent des connaissances intuitives* と言ひ得るのである (Nov. Ess., IV, 2, Gehl., V, 347)。然るに彼は直ちに之に次いで *toutes les vérités primitives de raison sont immédiates d'une immédiation d'idées* と言ひて單純觀念の原本的理性真理よりも一層基本的なるの意をほのめかすことを怠らないのは何故であらうか。

私の見る處によれば、ライブニッツの自同命題自同的者の名にてよぶ處のものには、區別すべき三種のものが含まれて居ると思ふ。第一は總ての理性的眞理從つて自同命題其者をも基礎ける對象性の原理としての自同律或は矛盾律である。これは最も基本的の原理であつて、自餘のこれによつて基礎づけられこれに基いて證明される、自同命題と同列に置くべきものではない。次に彼の自同的公理、たとへば『各の量はそれ自身に等し』と云ふ如き命題は、等しく自同律に基くとは云ひ條、長方形は長

方形である』とか『若し四邊の正形が正方形ならば此圖形は正方形である』等の原本的  
 と云はれるものに比べれば遙に基本的にして、是等を基礎づける原則となるもので  
 ある。即ち假りに一々に別名を用ふれば原理と公理と而して本來の自同命題との  
 三者に明に區別し得るのである。然らば單純觀念とは如何なるものぞと云ふに彼  
 は *Estre, Unité, Substance, Durée, Changement, Action, Perception, Plaisir* を列擧し尙其他多數  
 にあると言ふて居る (*Novv. Ess., Préface; Gerh., V, 45; Vig., Gerh., V., 21, 196; Discours, XXVII,*  
*Gerh., I<sup>v</sup>, 453*)。單純觀念の數、名乃至其體系的關係に至つては甚だ不明である。彼は  
 之を確定排列せんとの意志は發表して居るけれど、其實之を實行はしなかつたので  
 ある (*Lettre à Bougnuet; Erdl., 723*)。今これを前三種の自同的者と比較して見るに、單純觀  
 念は自同原理に基いて可能であるから、之れに従屬する。然し公理に比すれば一層  
 基本的である。前例の『各の量はそれ自身に等し』てふ公理が成立つ爲めには、先づ量  
 と云ふ概念が可能であらねばならぬ。然るにライブニツにあつては量は單純觀念  
 の中に數へられず、夫れよりは複合的従つて派生的の概念である。之によつても單  
 純觀念の占める地位は推知するに難くない。今之を圖に表はせば左の如くである  
 と思はれる。



斯く見ることに依つて本節の初めより問題として居つた自同命題と單純觀念との關係は不充分乍ら一先づ解明し得たものと私は信ずる。而してライブニッツが或時は兩者を並立的位置に置き、或時は單純觀念を以つてより基本的なるものゝ如く説いて居る所以の理も首肯し得られると思ふ。兩者を同一物に對する見方の相違——即ち之を成果の上より見て單純觀念と云ひ之を論理的生成の上より見て自同命題と云ふのであるとしても一應の統一的解釋はつけ得る。然し更に一步を進めて右に圖示する如き關係位置に立つものと見る時に初めて其實相其眞義が明白となつて來るのである。浩瀚雜多なる彼の著作の何れかには此想定を基礎附ける明亮な説述がないとは限らない。然し今迄の處私自身には之を發見し得なかつた。私は夫れよりも寧ろ、ライブニッツが單純觀念に如何なる職能を認定したか或は認定せんとしたかと云ふ點を究明することに由つて、上述の想定に一層適切なる立證を與へることが出來ると思ふ。而してそれと同時に上來の分析的論理の限界と新生面

の展開とをも併せて示唆することが出来る様に思ふのである。

## 十三

ライブニッツは初め單純觀念を素數のアナロジーに於て想念した。即ち或少數の單純觀念を確定して之を符號に表はし、其結合分離によつて既知の眞理を證明すると共に新なる眞理を發見し得るものと考へた。彼の思想發展史上特に其論理思想形成上に於て極めて重大なる意義を有すと云はるゝ夫の *Dissertatio de Arte combinatoria* 1667 (*Gerh.*, IV, 27—102) は、即ち此計畫の最初の發表である。此小論文の要旨は次の三點に約することが出来る。第一に凡ての複雑なる思想は之を分解して單純概念とすることが出来る。而して逆に此單純概念を結合することによつて凡ての複雑なる思想は構成することが出来る。丁度種々の數は凡てこれを素數に還元することが出来る、又逆に是等素數の結合によつて諸種の數をあらはし得るがごとくである。

第二に右の單純概念は其數少數である。之に一々記號或は符號を與へ複合概念は此記號の結合によつて表はし得る。第三に此記號の有ゆる可能的結合を構成排列することによつて既知の眞理を證明し得るのみならず無數の新眞理を發見するこ

500  
 とが出来たる。此の計畫はやがて *Characteristica Universalis* 及び其一部分をなす *Calculus ratiocinator* の説を産み來り現代 *Logistic* の想源として純粹數學純粹論理派の人々に特に尊重される處である。斯くの如き要素概念として見られたる單純觀念は『人間思想のアルファベット』(*l'Alphabet des pensées humaines*)とも命名され、彼の終世省察考案の對象となつたものである (*Lection à Oldenburg 1676*; Gerh., VII, 11. *Confessio Naturae contra Atheistas, 1669*; Gerh., IV, 103. *De Characteristica universalis*; Gerh., VII, 185, 199)。數と其法則とを人間認識の理想的原型と見『數は謂はゞ形而上學的の原型算術は一種の宇宙力學である、事物の力は之に於て自ら顯現す』と云へ極言した彼が (*De Characteristica universalis*, Gerh., VII, 184) 右の人間思想のアルファベットによつて論理數理のみならず一切存在の知識、事實的認識迄も凡て構成生産し得との豫想を抱いたのは自然のこと、云はねばならぬ (*De Arte combinatoria*, Gerh., IV, 44, 56)。單純觀念を要素概念として使用し工夫し開展し行つた次第は、クローチエラの研究によつて極めて詳細に闡明された。然しライブニッツの單純觀念の見方使用方は單に此方面だけには止らない。それより後に考出され夫れと交錯して使用されては居るが、認識論上夫れにも劣らず價值大なる今一つの見方がある。即ち函數關係のアナロジーに於て考へられたる關係概念とし

ての單純觀念である。此點に於て彼は直ちにカントの範疇論の先驅をなして居るのである。

單純觀念を關係概念として想念すると云ふ新見解は、彼が千六百七十三年より千六百七十六年に至る迄の巴里滞在中に獲たものであると云はれて居る (*Class. Euk.*, 1744)。彼は此見方を實地に適用して幾何の微積分を發見し、幾何學をば感覺の援けを借りない純粹數學の位置に上せた (*Characteristica Geometrica*, 1679; *Math.*, V. *De Analysis* *Stius*, *Math.* V. *Specimen Geometricae Invenitae*; *Math.* VII)。ニュートンと功を競うた夫の微分概念其者の發見の如きも主として單純觀念に對する此見方の歸結ではあるまいかと私は想像するものである (此點は尙一層の研究を要する)。彼は進んで之より自然科學の基礎概念たる時間空間及び力の概念を演繹し夫が單なる意識内容即ち夢幻と差別する處なき現象に對象性を保證するアプリアリたる所以を明にした。現象をして實在的ならしむるものは其 *liaison rapport* にある。而して此綜合の基礎は一面は自覺の綜合作用にもあるけれども一層根本的には自覺をして自覺たらしめる先天的眞理にある。然るに先天的眞理の根本的形態は單純觀念である。斯くして關係概念としての單純觀念はよく現象をして *phenomenon reale seu bene fundatum* たら

502 しむるを得るのである(Lecture 3 de Volder, Gerh., II, 276. Vig., Gerh., II, 92, 262, 492. Gerh., III,

622. 哲學研究第二十一號拙稿『最近のライブニッツ研究に就て』第二十九頁以下)。ラッセ  
ル、グーテュラは此方面を輕視して居る。然し之は彼等が『關係の論理』を高唱するにも  
係らず、關係概念としてのアブリオリの眞義に未だ徹しない爲めである。之に反し  
てカッラーの研究は主力を此見方の闡明に注いで居る。要素概念と關係概念、或は  
素數概念と函數概念と云ふ此單純觀念に對する二重の見方及び適用が、ライブニッツ  
にあつて如何様に關係し進展して行つて居るかは、之を別の新なる研究に待たねば  
ならぬ。私の當面の問題とする單純觀念の性質職能乃至夫が自同的者の中に於て  
占める位置如何は、上來の略說によつても大凡そ推知し得られると信ずる。(尙此二  
つの見方の中、關係概念の方が後年には優越の位置を占めて來たこと、要素概念の  
方は、より實質的に關係概念の方は、より形式的に單純觀念が解釋使用されて居るこ  
ととを附言して置きたい)。

單純觀念に就ての二つの見方及び職能はライブニッツの論理の課題の新たな開展  
を豫示或は前提して居る。等價置換の原理としての自同律を基礎として *praedicatum  
inest subiecto* の課題を解いて行く限り、單純觀念に對しては第一の要素概念としての

見方のみが許される。而して此の如く解したる單純觀念の確定及び結合によつて總ての眞理の證明と發見とを行ひ得る爲めには『總ての自同命題は眞なり』と云ふ自同律の外に、『總ての眞理は自同的なり』と云ふ別の補完原理を必要とする。彼れが命題證明の第二原理として提出せる理由律に就ての説明には正しく此の補完原理の任に當ると解釋し得る部分がある。次に關係概念としての單純觀念は雜多の統一の原理である。對象的綜合の根據としての第二の見方は最早單なる自同律だけでは基礎づけられない。認識のアプリオリとして使用されて居る單純觀念は暗黙の裡に自同律とは別種の綜合原理に立脚して働いて居るのである。認識の原理としての理由律の本來の意義は正しく此方面に横はつて居ると私は見るものである。而して理由律に對する此二様の職能意義をライブニツに覺悟せしめたのは經驗判斷である、彼の所謂事實的偶然的眞理である。即ち賓辭は主辭に含まるべしとの一般課題は經驗判斷に當面して新なる開展をなし新なる原理を要求し來つたのである。此方面に就ての研究は第十五節以下に譲り、茲には尙暫らく單純觀念其者並びに彼等相互の關係に於て綜合の問題が如何様に示唆されて居るかを討ねて見たい。

單純觀念即ち *prima possibilia* はこれ以上如何にしても分割し得ざる概念 (*notiones*



irresolubles)と云ふ(Meditationes; Gerh., IV, 425)。而して合宜的直覺的認識は此第一可能  
 的者に對してのみ可能である(第十二節參照)。然るに此直覺的認識に於ては認識當  
 體の omnes ingredientes が一時に一緒に判然と認識されると云ふ(Opt. cit. 423; Discours,  
 XXIV; Gerh., IV, 495f.)。これ抑も何を意味するのであらうか。惟ふにその構成要素  
 は直覺によつては判然と區別して知覺されるけれども思惟によつては之を分析し  
 得ずとの意であらう。何となればライブニツの分析的論理は、苟くしくも思惟の分  
 析を許す限り、自同律によつて之をより、更に單純なるものに置換へんことを要求し  
 て已まないからである。此故にこそ彼は公理も尙證明を要すと云ひ得たのである。  
 されば直覺知の内容たる單純觀念の全成素は如何にしても思惟の分析を許さぬも  
 の、若し之を分解すれば夫は最早單純觀念ではなくなつて、却つてより、複合的派生的  
 の概念となると云ふ摩訶不思議なる原本的統一をなすものと云はねばならぬ。一  
 と多、全體と部分との此不可思議なる渾一體こそ、正しく雜多の統一てふ綜合命題の  
 最も原本的なるものゝ姿ではないか。ライブニツの言葉を用ゐて云へば、之れ最も  
 原本的なる une multitude dans l'unité ではないであらうか。彼の possibles の綜合なる  
 compossible の問題を單純觀念其者の内面的構造に於て見得ると私は思ふものであ

る。而して正しく茲に彼の分析的思惟の限界なる綜合の問題が伏在して居るのである。

轉じて單純觀念相互の關係を見る。彼がスピノーザに示した一小論文に於て早く *omnes perfectiones esse compatibles inter se* と説いて彼等相互の間に兩立性の存在する意を明にした (*Quod Ens perfectissimum exist*, 1676; *Gerh.*, VII, 261)。茲に完全なるものとは單純觀念を神の絶對的屬性として見たる場合の別名である (*Meditationes*, 425)。尙千六百八十年頃公爵夫人 *Sophie* に送つた手紙にも *je soutiens que toutes les formes simples sont compatibles entre elles* と言うて居る (*Gerh.*, IV, 296)。然らば彼は如何なる原理に基いて彼等の兩立性を證明して居るか。彼の自同律矛盾律についての解釋を本とし、單純觀念に對する第一の見方を採用して最も道理ある立證を試みれば、クレーチエラの採つた解釋となるであらう。即ち彼等は相互異なるのみならず少しの共通要素も持つて居ないから互に *disparates* である。従つて彼等の間に矛盾を生じ得ず、彼等の結合にも矛盾は生じ得ないのであると (*Cont-Log.*, 194-195, 366)。此解釋を裏書きするものは前にあげた『完全なるものは存在す』と云ふ一文の論旨である。茲では單純觀念が積極的絶對的即ちその對象を無限に表現する處の *qualitas simplex* として想念され、彼

等の不兩立性を論理的にも直覺的にも知ることが出来ないとの理由によつて同一主體に結合し得とされて居る。即ち單純觀念の不可分割性と異種性とによつて却つて其綜合關係に立つことが消極的に立證し得と考へられたのである。然るに單純觀念の第二の見方をとる時は、其綜合關係についても新なる解釋が生じて來る。私は之をライブニッツが好んで言明する夫の『可能性には存在の要求又は傾向がある』『神にあつては可能とは現實との謂である』と云ふ主張に於て發見し得と信ずるものである(De rerum origine radicali; Gerh, VII, 303. Monad, § 40)。存在或は現實とは可能的者の綜合なる *Compossibles* の謂に外ならぬ。認識の理想であり然るが故に又認識の根本豫想である神の境地に於ては可能的者は即ち現實的者であり *compossibles* である。茲に單純觀念の理由律に基く綜合關係が認識の根本假定として前提されて居るのを發見するのである。此等の點については、事實的眞理と理由律とについてや。精しき研究を積んだ後でなければ確たる解答を與へることが出来ない。今の處では、第一第二何れの見方に於ても、單純觀念其者に於て既に綜合の問題が伏在し假定されて居ることを明にし得れば足つて居る。これ自同律を唯一の立證原理とする限りライブニッツの論理に對する限界である。而して茲にも亦彼の論理の課題

(*praedicatum inest subjecto*) の新なる進展と新原理の想定とを必然に要求する問題が存在して居るのである。進んで此新局面に入るに先ち、彼の永遠必然の理性的眞理と稱するものが眞理として有する一般特質を概観して、それが妥當説發展史上に於ける意義旨趣を豫示して置きたいと思ふ。(未完)